

## 詩歌・小説の中のはきもの (第19回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

177 素足もまた「いき」の表現となる場合がある。「素足も、野暮な足袋ほしき、寒さもつらや」といいながら、江戸芸者は冬も素足を習いとした。粋者<sup>すいしや</sup>の間にはそれを真似て足袋を履かない物も多かったという。着物に包んだ全身に対して足だけ露出させるのは、確かに媚態の二元性を表わしている。しかし、この着物と素足の関係は、全身を裸にして靴下または靴を履く西洋風の露骨さと反対の方向を採っている。そこにまた素足の「いき」たる所以がある。

九鬼周造

★『「いき」の構造』から。現在、「いき」という美意識は消えてしまっている。九鬼によると、日本民族の「生き」かたの一つで、第一の徴表は異性に対する「媚態」であるという。媚態とは、「一元的の自己が自己に対して異性を措定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である」。哲学者に詳しい説明を求めると却って分からなくなる。そんな当たり前のことに愚痴を洩らすのを「野暮」という。

178 パリで、友人がパンプスを履いていた。

「日本人の旅行者って揃いも揃って、スニーカー、もしくはそれに近い靴で旅していて、エレガントじゃないわ」

というようなことを、パリに住む日本人から言われたらしい。それで彼女はパンプスを履いて、冬のパリにやってきた。そうよ、だって、日本にいたら、これで歩いているのだもの、という考えだった。

だが、何度も滑りそうになったり、転ん

だり、私の目の前でもすってーんと。

西村玲子

★『おしゃれな旅じたく』から。急な坂道の多いサンフランシスコの友人宅をハイヒールで訪ね、「へろへろ」になった人の話も紹介されている。スニーカーブームといわれた時期もあったが、今や実用生活とファッションに定着してしまった。“大人の運動靴”だから世界のどこへも、どんな季節でも履いて行ける。「揃いも揃って」などと言われれば、普通、“プライド”もしくは洒落っ気のある人なら脱ぎ捨ててしまいそうなものだが、他人事のような顔をして私も履いている。

179 タンジールのディスプレイはチープきわまりなく、素晴らしいものが多い。…フランス広場にあった靴屋のディスプレイも、そんなひとつだった。タンジールは靴屋が素晴らしい。靴の片方を宙吊りに雑然と並べてあるのだが、左だけとか右だけとかいうポリシーが非常に適当で、この適当な配色、そして並べ方の適当さが微妙なパーフェクトさをかもしだす。そのうえ店構えが大理石ときた日にゃ、地中海に向かってひっくりかえる思いを必死にこらえるしかない。

大竹伸朗

★『カスバの男 モロッコ旅日記』から。日本の中学生や高校生に靴の踵を踏んで履くのが恰好よいと考える少数派がいる。モロッコのバブーシュという靴は踵を踏んで履くのが多数派である。日本モロッコ協会

からの派遣団に加わって三度、タンジール・カサブランカ・首都ラバト・マラケシュを回って、たくさんの踵の踏まれたバブーシュを見てきたら、踵を踏むのはだらしがないなどと考えるのは止めた方がいいと宗旨が変わってしまった。

180 スーツにスニーカーでは、きっと母が泣くだろう。

というわけで私は、町を見物する余裕もなく靴を買いに市内のデパートへ走った。そのとき購入したハイヒールを、まだ持っている。受賞式の日をいれて数えても、まだ三、四回しか履いたことがない。なぜならそれはキンキラキンの飾りの付いた、ちょっと馬鹿げているほど派手な靴なのだ。減多なことでは履けないのである。

鷺沢 萌

★『ナグネ 旅の途中』から。作者は先年自死した。これは泉鏡花賞をうけるため金沢へ行ったときのことだという。足のむくむ午後買うといいという靴購入の原則があるが、いつも地味あるいは派手な靴を買ってしまう人には「嬉しいとき、悲しいときに買いなさいをつけ加えたい」と彼女は書く。嬉しいときに買った靴を、出してジーツと眺めていたら、彼女だって、きっとまた別の明るい選択もできたのだろうに。

181 靴墨とブラッシを買って彼とOという友人と三人で図書館の焼けあとから拾った煉瓦を足おきの台に使い、客を待った。

ブラッシが一つしかないため、赤靴を赤黒くしたり客のズボンの裾をよごす失敗を起こした。しかし三田には親切な塾生が多く、自分で靴をみがいて金をおいでしてくれる人もいた。毎月、本を二、三冊買える収入があった。

遠藤周作

★『落第坊主の履歴書』から。「彼」というのは後に倫理学科の教授になった三雲夏生。私の勤務していた会社には、創業者が海軍大臣山本権兵衛の家に行って靴を磨き、海

軍御用達になったという話が伝わっていた。これを真似てお世話になっている先輩の家に盆暮れの挨拶に行ったとき、頼んで靴を磨かせてもらったことがある。この先輩は亡くなるまでの二十年ほど、私がお届けする以外の靴はお召しにならなかった。他人の靴を磨くというのは生半可なことではできないことが身に沁みて分かった。

182 つきつめてなに願ふ朝ぞ昨日の雨に濡れてつめたき靴はきゐたり

さむざむと霜おく路に昨日より汚れし  
ままの靴はきて出づ

上田三四二

★『上田三四二歌集』の「冬日」から。上田は医師、履き替えを持っていないほど貧しい生活をした人ではない。長く癌を病み、何度も克服し、結局癌で果てた。濡れたまま、汚れたままの靴を履いている自分を意識できるほどに冷静ではあったが、靴を乾燥させたり、手入れしたりするまでの余裕はない時期に歌ったものだろう。病が治まったとき吉野山山麓の温泉に遊び、「ちる花はかずかぎりなしことごとく光をひきて谷にゆくかも」という絶唱を残した。

183 学校に行くようになってからのことである。一枝はいつでも、藁草履を穿いて行くのであったが、帰りに雨になることがある。裾を高く端折って、一枝は裸足になる。「足は濡れても腐らんが、草履は腐るけえの、」と、いつか父の言ったのを覚えているからだ。冬になって、帰りに雪になるときも同じである。一枝は草履を手を持って、裸足になった。そして、雪の上を歩いて帰った。一枝はいつも歩いて帰る沖の町は通らない。町の裏を向う堤へ廻って、小溝のそばの裏道へ出る。そこは人眼がないからだ。「可哀そうに。また一枝さまが、裸足でお往(い)にんされるでよ。」人にそう言われるのが、一枝は好きではないからだ。雪の上を裸足で歩いて、一枝は可哀そうではないからだ。

宇野千代

★『或る一人の女の話』から。埼玉県鴻巣市の農家で昔の話を聞いたとき、その主人が雪の日に、二キロほど先の小学校へ裸足で通ったものだ、「履物がなかったからね、昔は」と言った。それで、私も雪の日下駄の鼻緒が切れると足袋はだしになったり、裸足になったりしたことを思い出した。そんなむごいことを子供の自分がしていたと思いたくなかったのだろう、綺麗さっぱりと忘れていた。昭和二十年代初めのことだが、そのときはツイテいないとは思ったけれども、自分が哀れとは思わなかった。子供は強いもので、自分を哀れむことをしない。

184 私は靴と靴下が何よりも欲しくて、しかももう何年も穿いたことがなかった。もっとも今度は、難破船の溺死体から取った靴が二足あり、長持にも二足入っていて、大変助かったが、これは穿きよさの点でも、また堅牢さから言っても、我が国の靴とは比べものにならず、靴ではなくて、むしろ我々がパンプス(訳注 紐を用いず、そのままつま掛ける種類の短靴)と呼ぶ種類のものだった。

ダニエル・デフォー

★『ロビンソン漂流記(吉田健一訳)』から。島に上がってから二十四年目の五月十六日、スペインの難破船から彼は靴を得た。その時まで履いていたのは、「脚絆と同じ具合に脚の片側で編み上げるようになっている、半長靴に似たものを作って穿いていた。これはいかにも不様なものだった」。上着も半ズボンも山羊の皮だったというから、靴も山羊皮製だったのだろう。

185 日本人はカミ・シモの区別が峻烈で、足に穿くものを愛玩の小道具にしないが、西洋人や中国人にとっては靴はフェティシズムの対象になるらしい。しかし私ばもっぱら、シンデレラ幻想で、ガラスの靴に愛着している。…

私がかかない物をつめるのは、  
「驚かされたい」

という気分があるからだ。ガラスの靴の光彩陸離、私は眼がちかちかして、靴

がタカラモノになるという発想に、驚いているのだ。靴をてのひらにつつんで撫で、賞玩するという自在の観念の飛躍に、あたまのなかを洗滌された気がしているのである。

田辺聖子

★『手のなかの虹』の「靴、わがシンデレラ」から。花瓶、小物入れ、キホルダーやコーラのボトルキャップなどに靴のミニチュアは使われている。だが日本ではそこまで。あちこちの靴屋さんが、生まれて最初に履いた靴を金や銀で加工して保存するキャンペーンを実施しても、たいてい空振りに終わってしまう。外国の親なら普通に行っている“儀式的慣行”が日本にはないのである。日本人のよくやる“ヘソの緒”を残しておくぐらいの親心が、はきものの上にも芽生えてくれるとうれしいのだが。

186 「あ、オレも言われたことがある。『記者サン、いい靴、履いてますね』って」「あれオヤジの影響だろう」といま一人が言った。

「監督は『ヒトは靴を見ればわかる』って、つねづね言っているらしいから」

そのとき、十数年前の居心地の悪さが、いっきよによみがえった。そうだったのか。長嶋サンは女優のボロ靴を見ていたのだ！

檀 ふみ

★『どうも いたしません』から。記者を褒めたのは長嶋一茂。国民的ヒーロー長嶋茂雄は、〈記録〉よりもファンの〈記憶〉に残ったベースボールプレイヤーだった。狙い球を絞らず、直球、変化球、高低遅速も関係なく“動物的カン”で打ちまくった。守備も打撃も華麗を極めた。しかし、この話を聞くと、やはり理屈のない、アツケラカンとした頭脳の持主ではなく、彼も檀ふみの足元を見るほどの確率、つまり勘ではなく数字を頭に叩き込んでプレイをしていたことが判る。